未来への伝承

第187回

早世藩主土屋寛直の鎧

―黒漆塗両引合二枚胴童具足―

令和2(2020)年、土浦にゆかりのある一領の具足(鎧)が発見されました。頭を守る兜の前立は、熨斗を五本束ねた「結び熨斗」があしらわれ、祝いを表しているようです。首筋を守る鞠や、腹部や胸部を守る胴、太腿を守る草摺の裏側には金箔が貼られ、その上から透明な漆を塗る「白檀塗」が施されています。腕を守る籠手や、草摺などの裏側には、中国四川省で織られた「蜀江錦」が使われるなど、高価な材料がふんだんに用いられています。

小ぶりながら精緻で、意匠が尽くされた具足には、ところどころに土浦藩主土屋家の家紋「三石畳」や「九曜」があしらわれ、胴には「祥」と記された小札が付けられています。土屋家歴代当主のなかで「祥」の字が用いられるのは、8代当主土屋寛直の謚「祥善院」のみです。

寛直は7代当主英直の長男として生まれました。父英直が享和3(1803)年8月12日に35歳で亡くなると、寛直が家督を継ぎます。しかし寛直は病弱であったため、文化7(1810)年に予定されていた将軍徳川家斉への御目見も叶わずに亡くなりました。土屋家が作成した系図には、寛直は同8年10月2日に、数え歳にして18歳で亡くなったと記されています。しかし、実際には前年から急遽跡取りとなる養子探しが行われており、亡くなった年月や年齢ははっきりとしません。土屋家の家臣たちは跡取りを求めて奔走し、最終的には水戸徳川家から治三郎(のち土屋彦直)を養子に迎えることで落着しました。

若くして亡くなった寛直に関する歴史資料は極めて少なく、その足跡をたどることも困難でした。令和2年に発見された具足は、その大きさや当時の記録から、寛直の鎧着初に用いられたものと考えられます。この発見により、寛直の体格が小柄であったこと、成長した寛直に対して土屋家が豪華な具足を仕立てていたことが明らかになりました。

寛直の早世は他家から養子を迎えるという、土屋家にとって転換点となる大きな出来事でした。土屋家、そして土浦藩にとって重要な意味を持つこの具足は、5月12日(日)まで開催している市立博物館・上高津貝塚ふるさと歴史の広場合同展「土浦〝モノ〟語り―資料が語る土浦の歴史―」で、市立博物館に展示しています。ぜひご覧ください。

問 市立博物館(☎824・2928)

黒漆塗両引合二枚胴童具足

土屋家　三石畳紋

3つの石からなる紋。
石畳ともいう。

土屋家　九曜紋

中心が太陽、周りが星。
厄除けに通じる。